

昭和五十一年度 陵墓関係調査概要

昭和五十一年度の陵墓營繕工事を実施するに当り、施工区域内の陵墓の原初の遺構・遺物や、包蔵する文化財の保存を考究するために、次のように事前調査及び立会調査を実施した。

(事前調査)

- 一 宣化天皇陵（奈良県橿原市鳥屋町字見三才）の外堤止水壁設置区域の調査
担当 石田茂輔・笠野毅・表野保治・大井康守・前川勲・北田健郎
- 二 開化天皇陵（奈良市油阪町）の外堤止水壁設置箇所及び渡堤樋管改修箇所の調査
担当 石田茂輔・大井康守・山中弘夫・松岡和男・池谷浩行
- 三 桃山陵墓地（京都市伏見区桃山町）内の崖地擁壁設置及び排水管敷設箇所の調査
担当 笠野毅・高田慶昭・南智次郎
- 四 桃山陵墓地内の銀明水井戸浚えに伴う調査
担当 北村素一・高田慶昭・南智次郎
- 五 大入杵命墓（石川県鹿島郡鹿島町小田中）の門改修箇所の調査
- 六 天智天皇陵（京都市山科区山科御陵上御廟野町）の外構柵設置箇所の調査
担当 戸原純一
- 七 仲野親王墓（京都市右京区太秦垂箕山町）の水道管敷設箇所の調査
担当 小畠実
- 八 天武・持統両天皇合葬陵（奈良県高市郡明日香村大字野口）の巡回路改修箇所の調査
担当 表野保治・西村義輝・小走公典・中村直嗣
- 九 大塚陵墓参考地（大阪府松原市西大塚一丁目）の渡堤土留柵設置箇所の調査
担当 真銅慶一・大平齊
- 十 仁德天皇陵ち号陪冢源右衛門山（大阪府堺市向陵西町四丁）の外構柵設置箇所の調査
担当 西野正治
- 十一 清寧天皇陵（大阪府羽曳野市西浦六丁目）の外堤土留柵設置箇所の調査

担当 中野順治・堀内朝保

十二 応神天皇陵（大阪府羽曳野市菅田六丁目）の東側境界線土留設置

箇所の調査

担当 中野順治・堀内朝保

十三 欽明天皇陵（奈良県高市郡明日香村大字平田）の拝所前崩壊復旧

工事箇所の調査

担当 西村義輝

十四 狹木之寺間陵（奈良市山陵町）の堤防崩壊復旧箇所の調査

担当 仲埜幸男

以上の調査は、事前調査は当部陵墓調査室員と、所管陵墓監区職員がこれを行ない、立会調査は、主として所管陵墓監区職員が陵墓調査室の指示に従って実施したが、重要な箇所については、陵墓調査室員と所管陵墓監区職員とでこれを行つた。

工事の設計と実施は、以上の調査結果に従い京都事務所工務課がこれにあたつた。

宣化天皇陵の調査については、考古学上の指導を末永雅雄書陵部委員にお願いし、又、調査を来見された網干善教関西大学教授・近藤義郎岡山大学教授・猪熊兼勝奈良国立文化財研究所室長等からも意見をうかがつた。

開化天皇陵の調査には、末永雅雄書陵部委員に考古学上の指導を、梅田甲子郎奈良教育大学教授に地質学上の指導をそれぞれお願した。又、

出土の遺構・遺物の処置については、奈良県教育委員会文化財保存課と連絡を取つた。

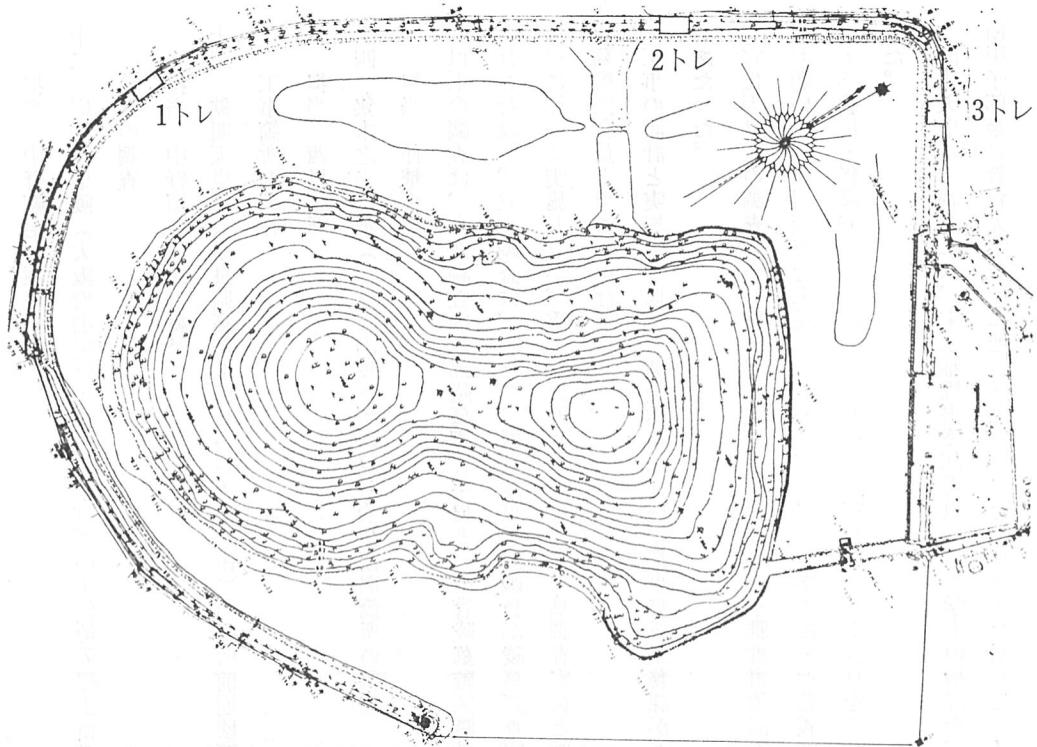
これらの調査のうち、遺構・遺物を検出したものについて、以下その概要を記載する。

（陵墓調査室）

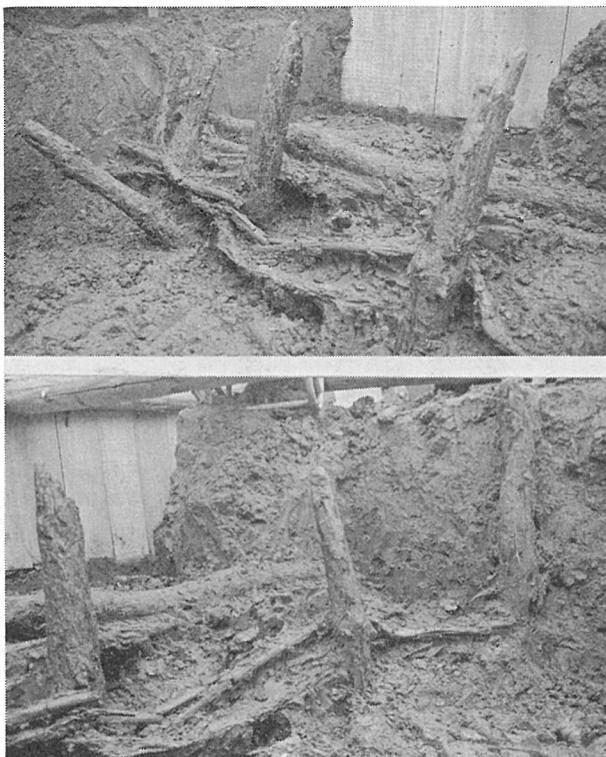
一 宣化天皇陵外堤漏水防止工事に伴う事前調査

宣化天皇と同皇后橘仲姫皇女が合葬された身狭桃花鳥坂上陵は、奈良県橿原市鳥屋町（旧高市郡畠傍町大字鳥屋字見三才・西浦・垣内）一、二七二番地にある。越智岡丘陵の北端に派出した一支丘の末端近くに位置し、丘尾を本陵の前方部前面と後円部背面とで切断し、支丘を利用して造営された前方後円墳である。この支丘を南にたどると、後円部後方には「船着山」と呼ばれる高まりがあつて、前方後円墳を含む小古墳群がある。その南は、「辨山古墳」と呼ばれる、畿内はもとより全国的にみても最大規模の方墳である倭彦命墓と連なるといふ。西方には、小さな谷を隔てて約三〇〇基の新沢千塚古墳群があり、これらを含めた越智岡丘陵上の古墳の総数は、約六〇〇基にも達するといふ。

この陵は、長軸を北北東にとる一段築成の前方後円墳で、原形を損つてゐるので正確を期し難いが、全長一三〇メートル、前方部巾七八メートル、同高一九・五メートル、後円部径八三メートル、同高一八・五メートルを計る。くびれ部の両側に造出しをもち、周溝が繞つてゐる。



第1図 宣化天皇陵トレンチ位置図 (1/1500)



第2図 宣化天皇陵第2トレンチ竹しがらみ出土状況

西北側の市道に面する外堤法面から浸出する水が、湧水が外堤を透過して漏出している疑いがあるので、漏水防止工事を施すのに伴う事前発掘調査を一〇月二六日から一月二十五日まで実施した。工法として、鋼矢板を間断なく打込む工法が最も有力な案として考えられたので、最初の遺構や地山が認められない限り、鋼矢板の深さ（五メートル）まで掘下げるべく、第1図に示す三ヵ所にトレンチを穿った。調査の結果、原初の遺構は認められなかつたので、当初の計画どおり施工した。また工事中も立会つたが、異状は認められなかつた。

第一および第三トレンチ（第3図、第4図2）は、全体的にみて前者が砂質の土で、後者が粘質である違いはあるが、おおむね外堤の築造なし修補の過程に類似性が認められる。すなわち、第V層を積上げた後、あたかも掘の浚渫土を法面に上げたようなIV層、さらにこのIV層の堀側の斜面を埋めて上部を平坦にしたIII層、最後に小土堤を盛上げたII層からなっている。ただし、第一トレンチの第V層は、地山の疑いが残っている。

第二トレンチは、非常に複雑な様相を呈する。掘下げたトレンチの最下部の第VII層には、全面に俵に粗砂と粘土塊をつめた土俵が積上げられており、その上に粗砂を均質に含む粘土層（VI層）を盛上げている。こ

の上の土層は、しがらみと密接な関

係があり、しがらみから堀側の方は

第VI層と同じ粘土層で有機質を含む

二が續いているのは文し しからみ

砂層と粘土層とが交互に疊返すよく

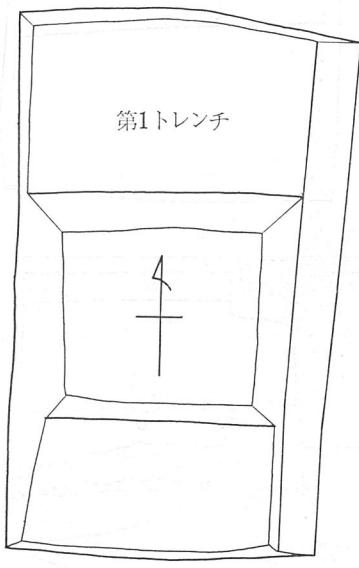
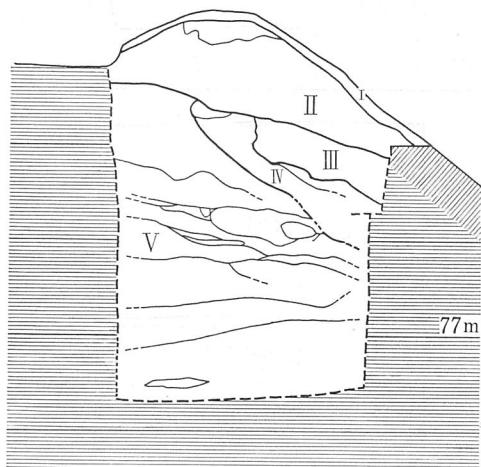
しまつた土で埋められ、さらに前者

をも覆つてゐる。しがらみは、二

三メートルの先の尖鋭な丸太杭を三

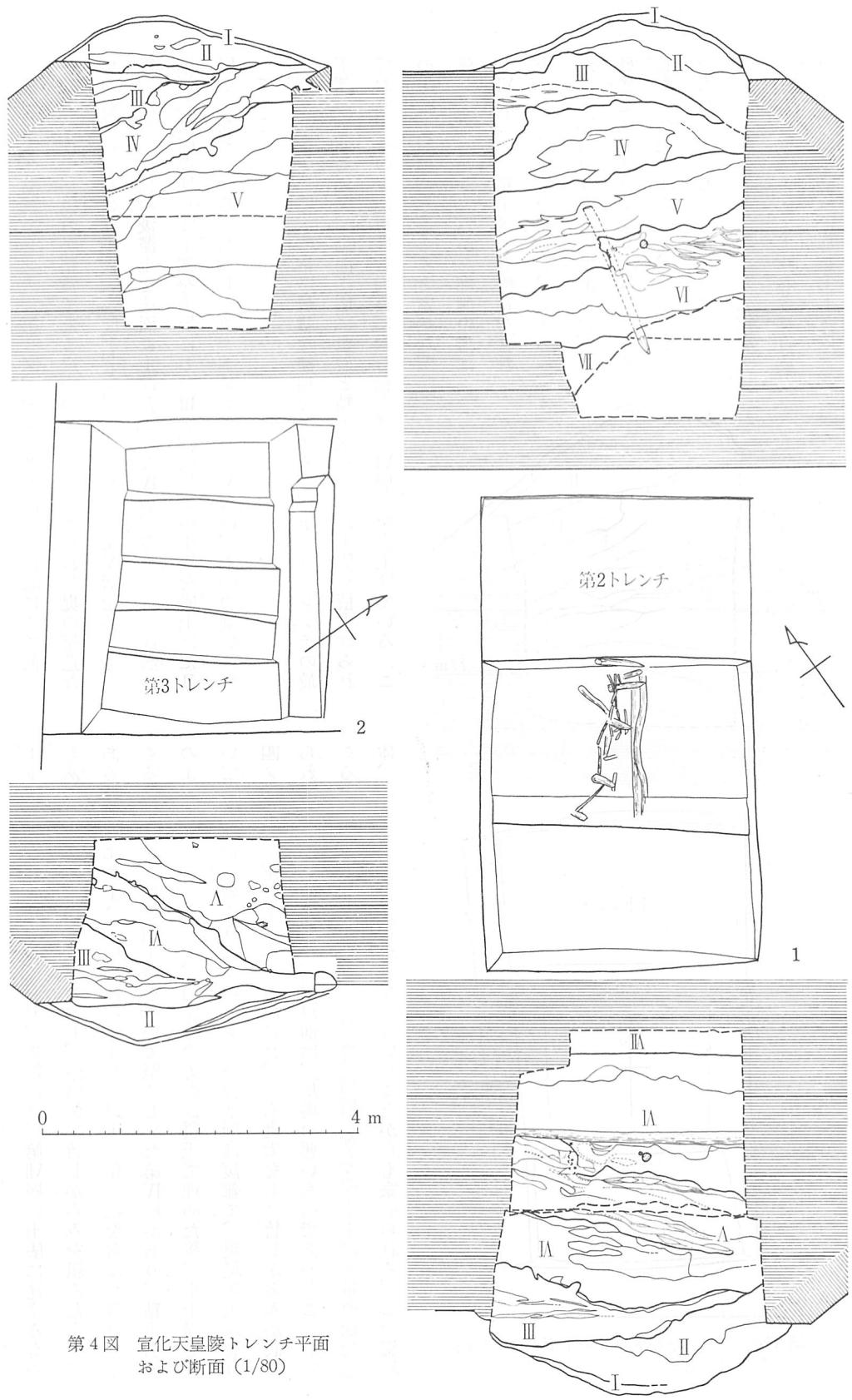
○五〇センチメートルおきに打辻

み（その頭は、ほぼ海拔七七・四メ

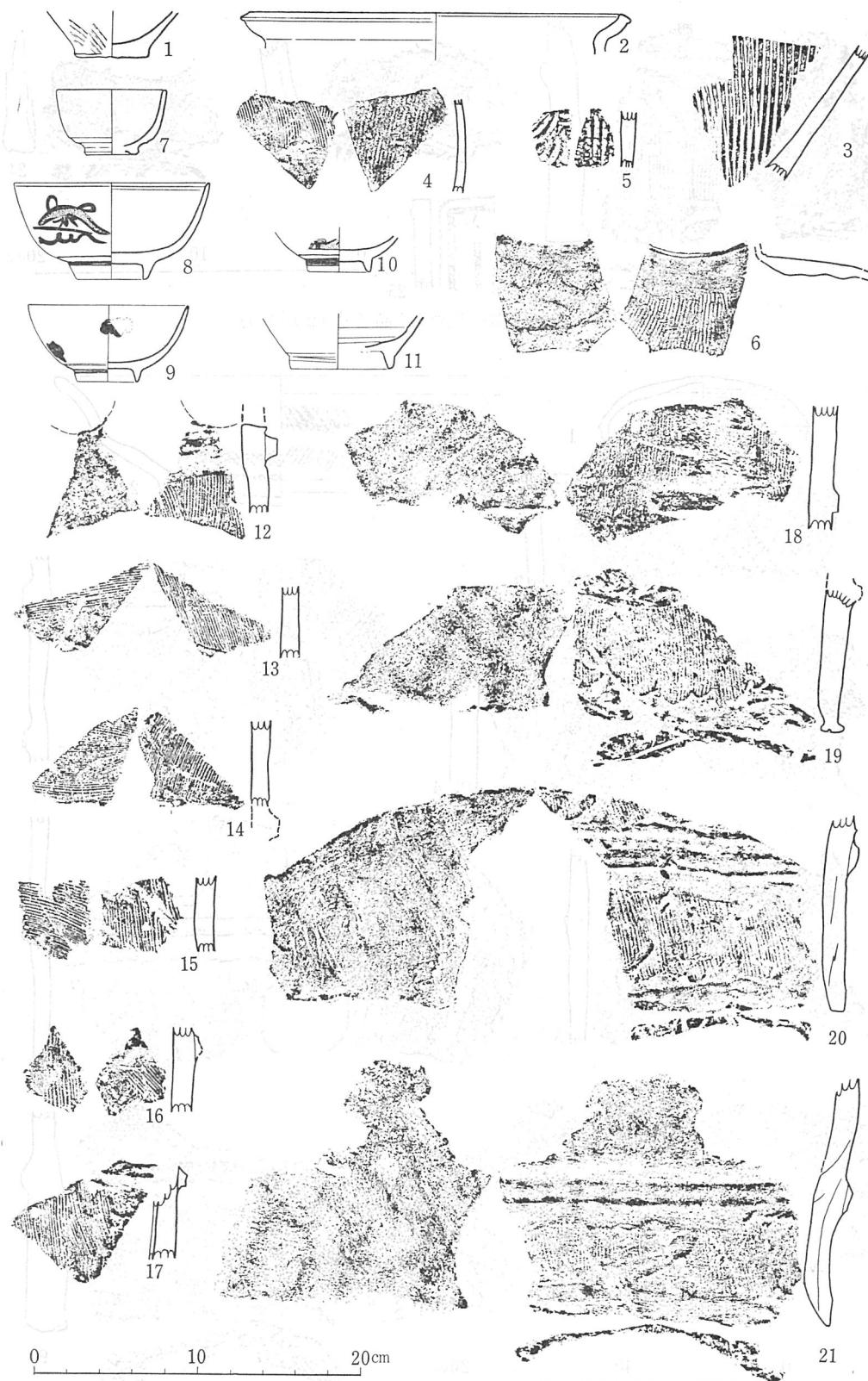


第3図 宣化天皇陵トレチ平面および断面
(1/80)

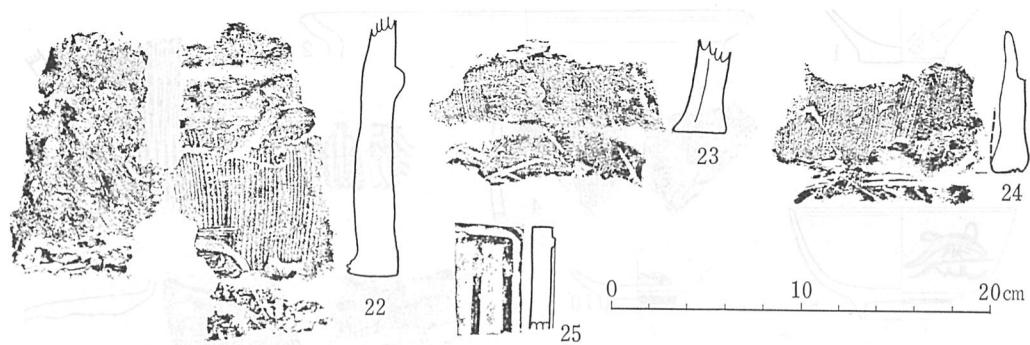
一トルのところでそろっており、先端部は、第VII層の土俵に達するものもある。堀側に胴木丸太を渡し、道路側に竹しがらみを組んだものである。これより上は、中心部のこぶし大以下の粘土塊を含んだ砂質土をくるむように、厚い粘土層を置いて堅くしめた第IV層があり、粘土羽金のようにみえる。さらに、道路際の方を砂質土で埋めた後、小土堤を築いている。以上のようにこのトレーナーの地層は複雑で、現堤防天端より四メートルも下に土のうが検出され、胴木丸太をもつ竹しがらみが設けられており、この場所が築堤以前は、足場の悪い水場であったことが窺える。このことは、竹しがらみより堀側の部分の土中に多量の植物遺体、例えば松葉や菰類が含まれていたことからも察せられる。この築堤



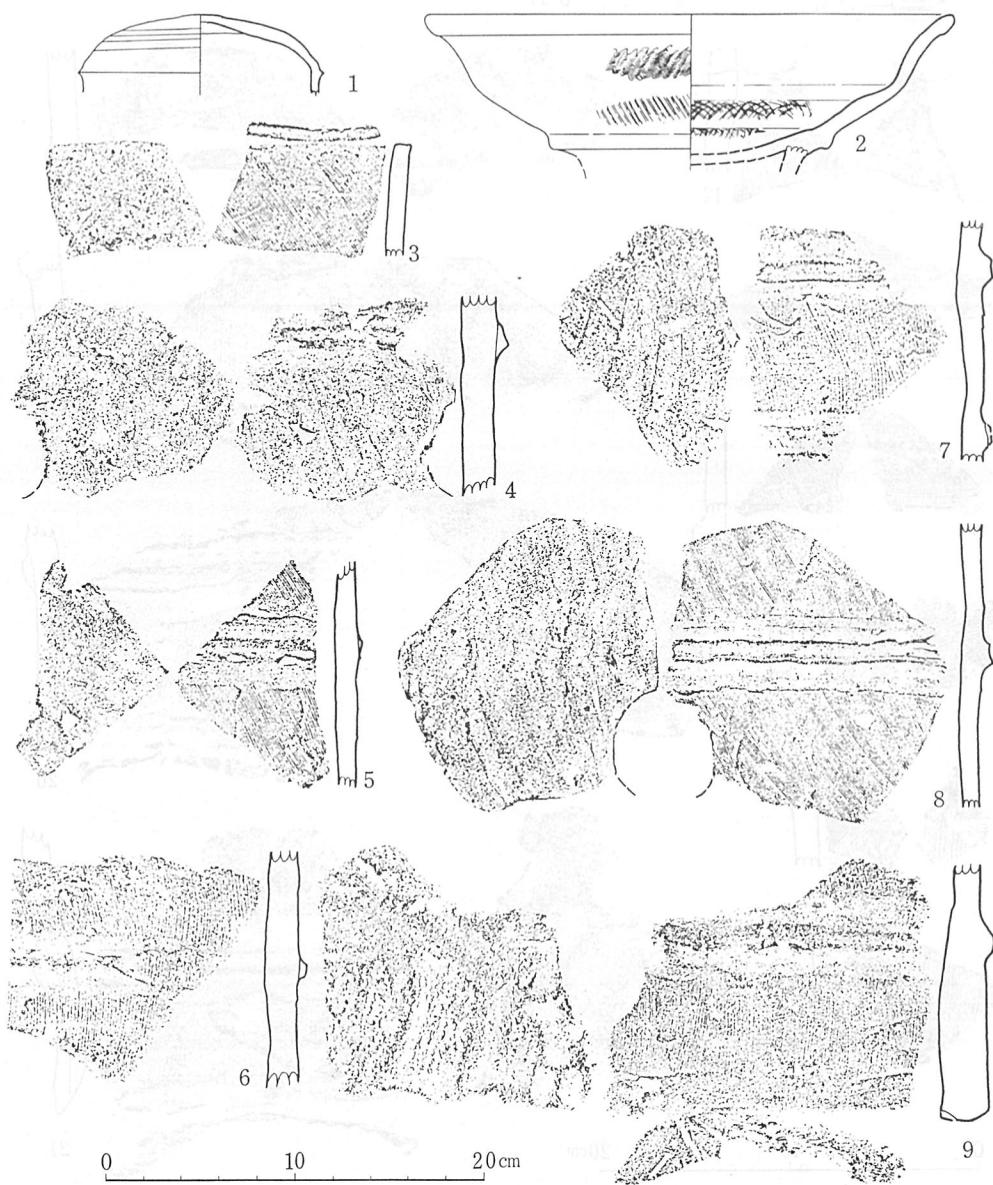
第4図 宣化天皇陵トレンチ平面
および断面 (1/80)



第5図 宣化天皇陵外堤の出土品（その1）(1/4)



第6図 宣化天皇陵外堤の出土品（その2）(1/4)



第7図 宣化天皇陵墳丘裾の出土品 (1/4)

の時期は明らかにできなかつた。

以上のように、保存すべき遺構は見出されず、発掘の範囲では、第一トレンチのIV層に疑問が残る以外、二次的な盛土と考えられ、遺物も、この盛土中から出土している。

土師器（第5図1・2）甕の底部破片1は、外面に叩き目が認められ、底部中央がわづかに凹んでいる。弥生後期末のものかも知れない。2は、中・近世の土鍋。外面に煤が付着。

炻器（第5図3）摺鉢の破片3がある。

須恵器（第5図4～6）いずれも破片で全形をうかがえるものはない

が、外面に叩き目を残し、6は広口壺かと思われる。

陶器（第5図7）ぐい飲み。近世初期の唐津焼き。

磁器（第5図8～11）8～10は碗、11は徳利の底部で、いずれもくすんだコバルトの染付、上釉は青味があり、近世初期の伊万里焼き。

埴輪（第5図12～21、第6図22～24）いずれも小型の埴輪円筒。外面は縦または斜め方向のハケ目。基底部の端部近くは、横ナデ（19～22）。

内面は指によるナデッケの上をナデて（12・18～22）、さらに横（13・

14）斜（15）または縦（16）方向のハケ目を加える場合がある。突帯は貼付け突帯で、横ナデをきつく施す低平なもの。透穴は円形（12）。焼成は、黒班のない赤焼きが多いが、14は須恵質、13は内部が須恵質。22

が第一トレンチ 第II層出土のほか、すべて第三トレンチIV、V層の出土。本陵の墳丘裾部の出土品と大きな差異は認められない。参考に、須

惠器と埴輪の一部を第7図に掲げておく。

（笠野毅）

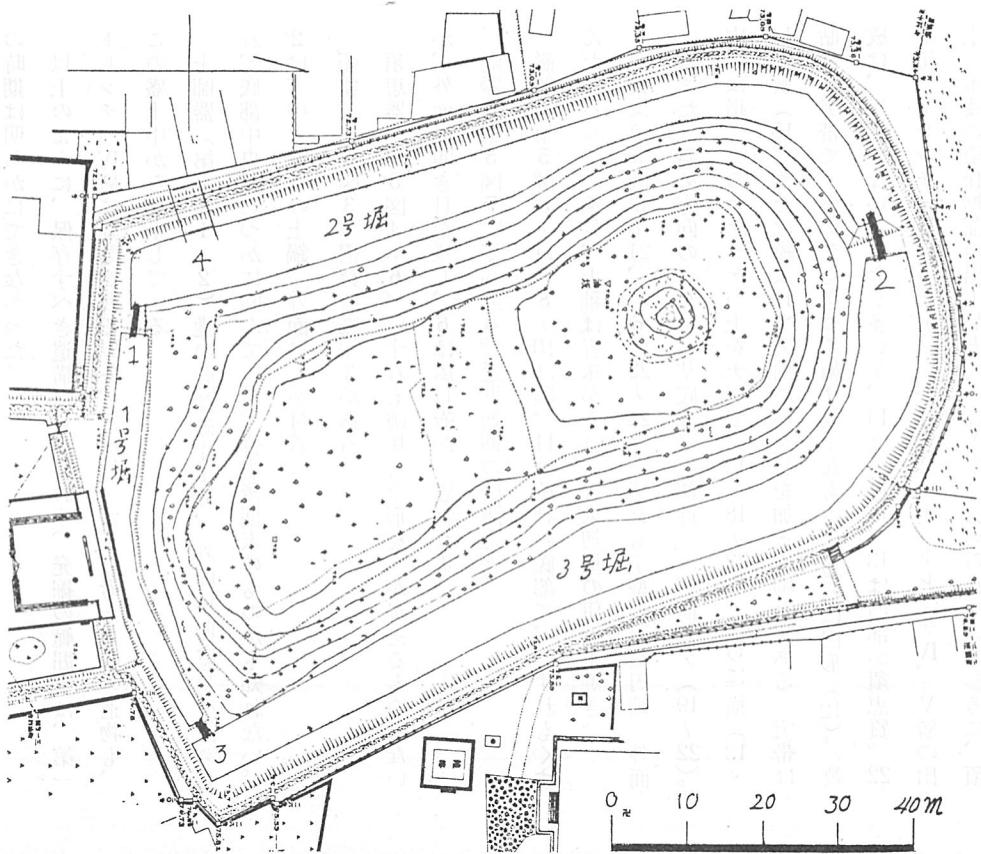
二 開化天皇陵の外堤止水壁設置箇所及び渡堤樋管改修箇所の調査

開化天皇陵の外堤の漏水止工事及び渡土堤の樋管改修工事を実施することになったので、昭和五十一年一月二十四日から二月一日まで、同陵の外堤及び渡土手で事前発掘調査を実施し、外堤では多数の出土品と、石組遺構及び、堀跡状の落込遺構を検出し、各渡土手からは、多数の出土物を採集した。

当陵は、春日山麓の東高西低の台地外縁に位置し、現在南は三条通りに面し、東は念佛寺（通称山の寺）と、北及び西は民家と、それぞれ境を接している。現在の陵形は、周堀のある前方後円墳であるが、文久の修陵の計画図によると、当時陵の墳丘としては、現後円部頂上の円丘部分が、山丘状の念佛寺墓地中央に存しただけである。現在の陵はこの山丘状の墓地を墳丘とし、これをとりまく田畠や宅地の低地を整形し、宅地であった西側に築堤して現在の周堀をこの修陵の折に形成している。

調査はこの周堀の渡土手三本に、それぞれを一メートル幅でこれを横断する樋管埋設溝を兼ねたトレンチを設け、西側の外堤には、漏水の涌出口の内側に当る部分に四メートル幅で堤と直交する長さ約六メートルのトレンチを設けて発掘した（第8図1～4の箇所）。

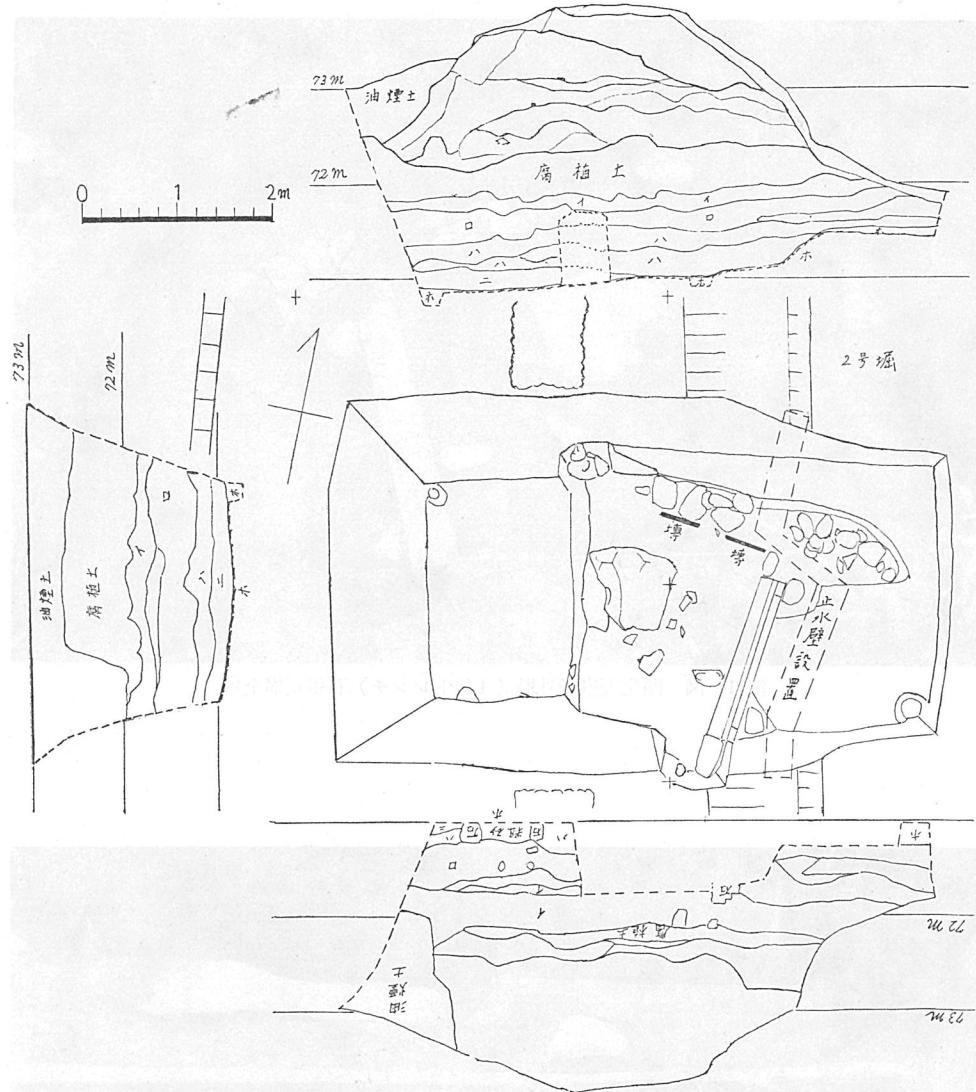
外堤の土相は、堤天端から約一・五メートルの厚さで盛土がある。塊



第8図 開化天皇陵トレンチ位置図（縮尺1/1000）

状又は層状の種々の土質の盛土で、瓦器・陶器等の遺物を多量に包含する。この盛土の外方斜面裾上には、厚さ三〇センチ程の油煙土の層が載っている(第9図)。恐らく製墨用松煙の滓を此處に投棄したものであろう。盛土の下方は五〇~一二〇センチの厚さで、腐植質の黒褐色土層がある。この層は文久の盛土か、或時期の生活面か判然としない。以下第9図の断面図のように、(1)赤色の焼土状粒子を多量に包含する堅い灰褐色層、(2)粗い砂粒を含む黒褐色腐植性粘性土層、(3)灰墨色のへどろ様粘性土層、(4)灰色粘性土層、(5)礫交りの黄土色粘性土層の順に累積する。(6)の層は梅田教授の教示によれば、佐保累層と呼ばれる第三紀層である。この層は墳丘の堀側斜面に露出し、現在の堀底面をほぼ水平に形成し、現外堤敷の部分で、西側へ約四五度の勾配で傾斜し四〇センチ程落込で西に向つて平坦面を形成している。この落込には、水中堆積物がたまつて、(4)(5)の地層を形成しているので、外堤敷の部分が旧堀跡の様な様相をしている。

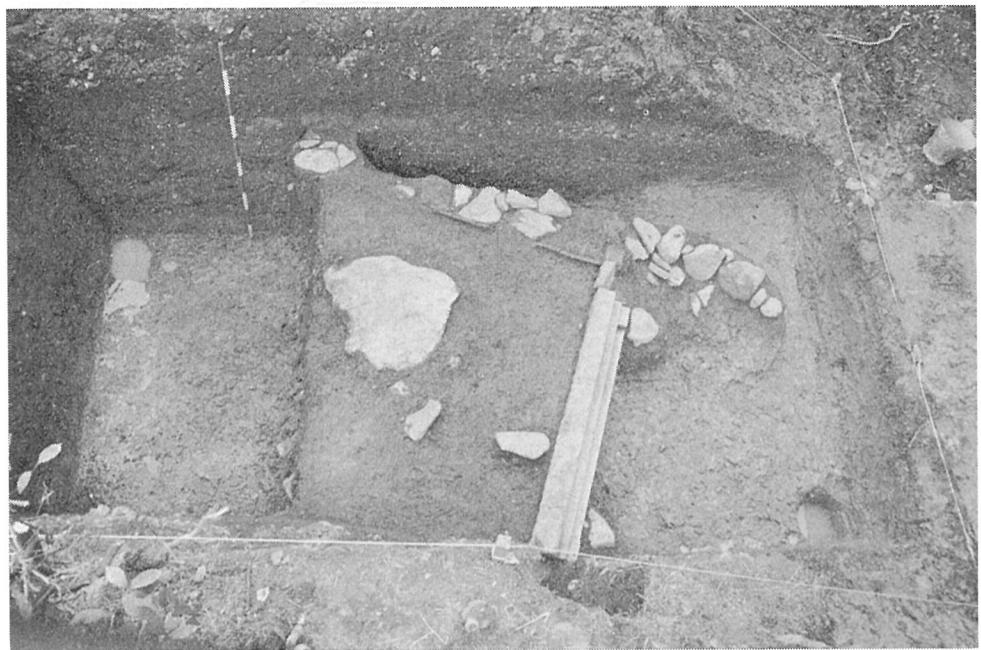
(1)の層上部から第11図の様な遺構を検出した。南北に横たわる長さ一・八メートルの花崗岩の切石と、この切石の北端で直交する壙の列及びその北側に接する河原石の敷石と、中央の東西一メートル、南北〇・九メートルの「かなんぼ石」と此辺で称する石である。遺構の性格については、大井康守調査補助員



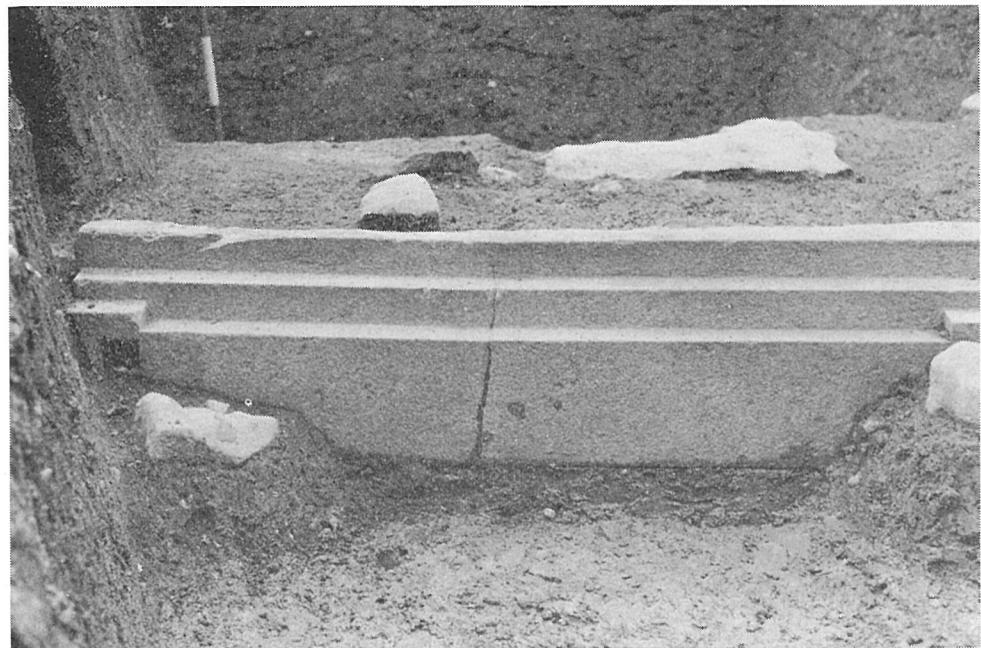
第9図 開化天皇陵外堤発掘実測図（縮尺1/80）（平面実測 松岡・池谷、断面実測 大井・山中）



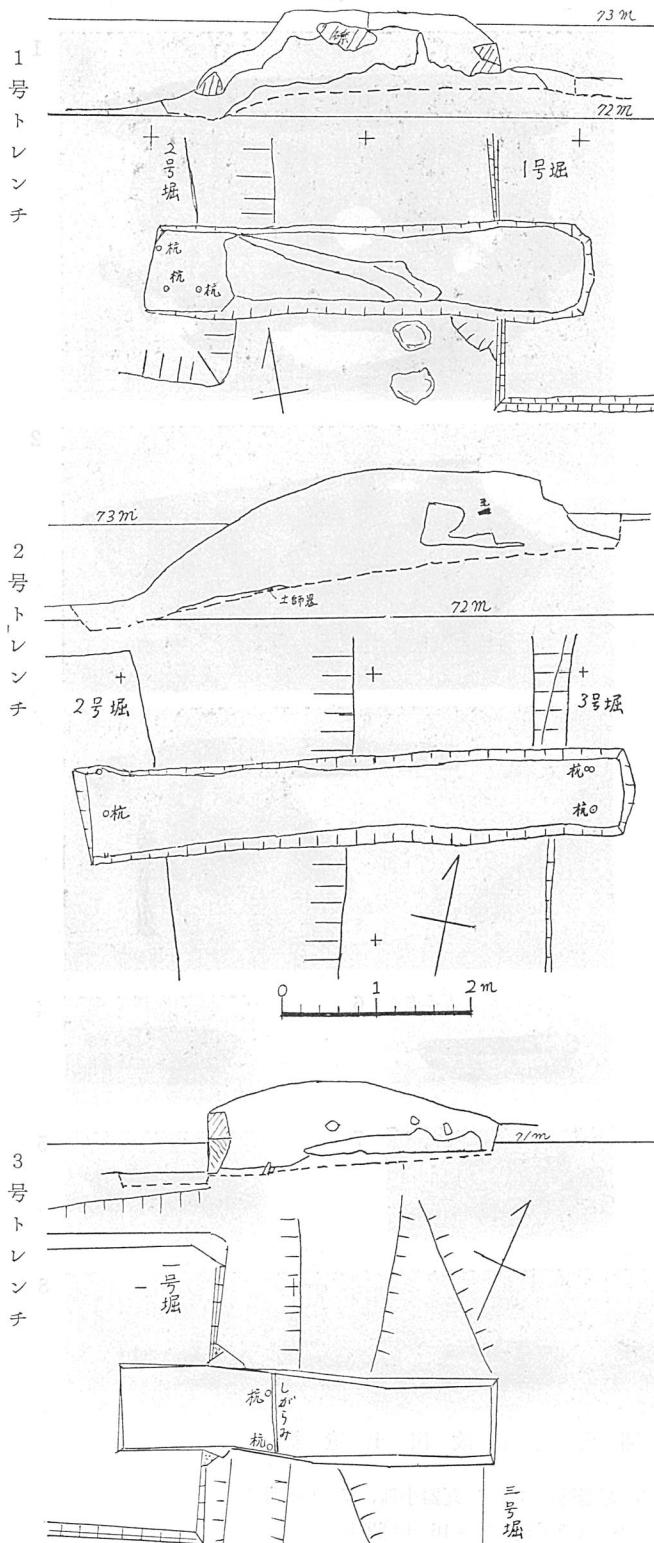
第10図
開化天皇陵外堤（4号トレンチ）
土師器皿出土状況



第 11 図 開化天皇陵外堤（4号トレンチ）石組遺構全景



第 12 図 開化天皇陵外堤（4号トレンチ）石組遺構の花崗岩切石



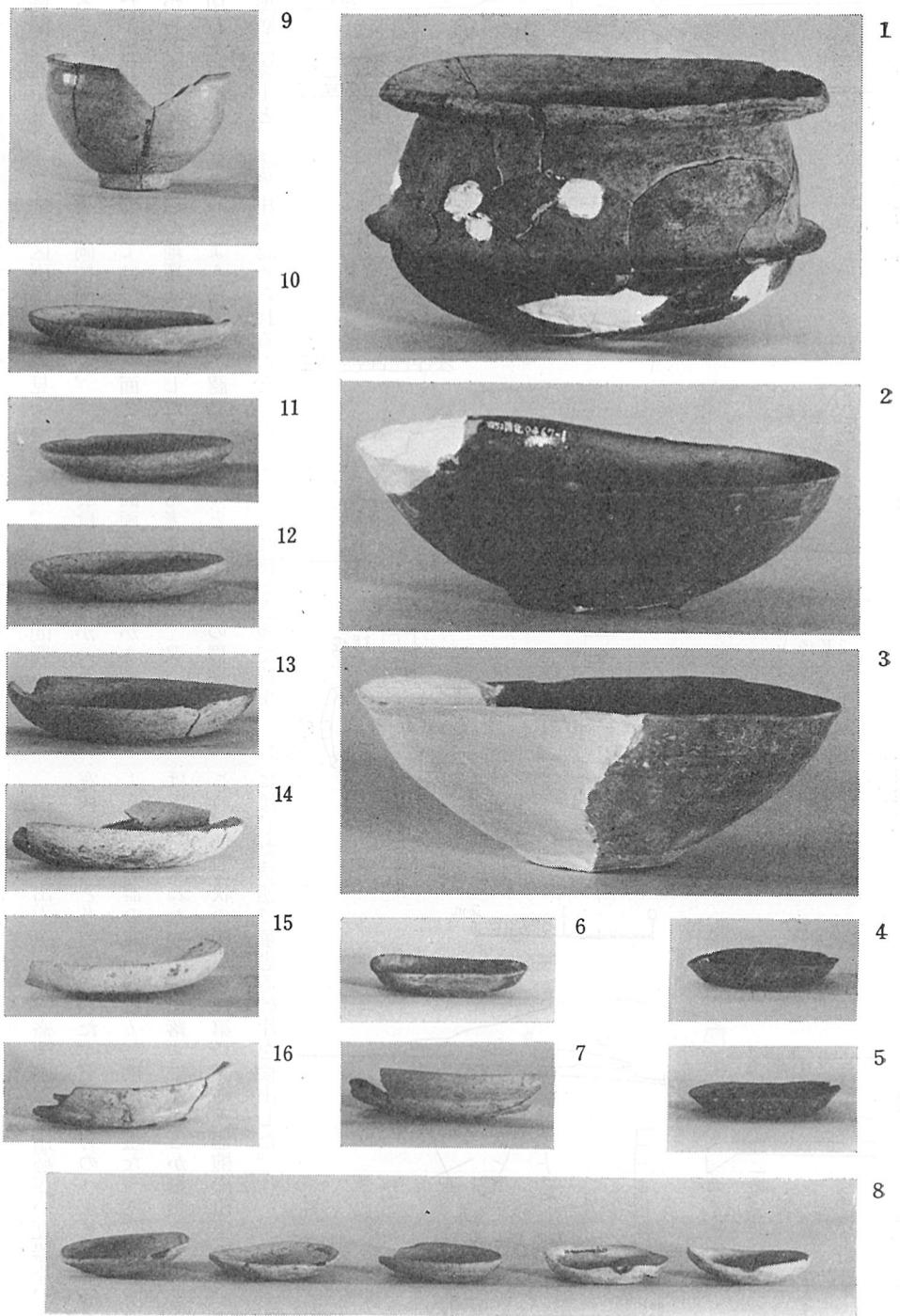
第13図 開化天皇陵渡堤発掘実測図（縮尺 1/80）
 （実測 松岡・池谷・中井・山中）

の切石を戸口の敷居石に見たてた、製墨場の土蔵の基礎とする見方や、庭園の石組又は、墓地の区画跡などの見方があるが、いずれも問題がある。末永博士、県教委の岡技師からも、明解な見解は得られなかつた。ただ第12図の切石については、三段の面とりと側面両端に角穴がある点から、堂宇基壇の護石の地覆石を再用したものとも考えられる。又この切石上面に火災にあつたような剥離が認められることと、切石の周囲の地層に焼土と、漆喰片が認められることから、ここに建物があつて焼失

した可能性は強い。

当地点の出土遺物は、盛土中より埴輪片、瓦器片、土師器片、陶磁片、寛永通宝など多数があつた。石組下方のへどろ様の層からは、第10図のように土師器の皿が五枚と三枚横に重なつて、二箇所で出土した。これは重ねて束ねた物が堀に落ちこんだとか投棄されたものと考えられる。このへどろ状の層からは第17図の瓦器碗も出土した。又佐保累層の上面に接した状態で須恵器破片を検出した。

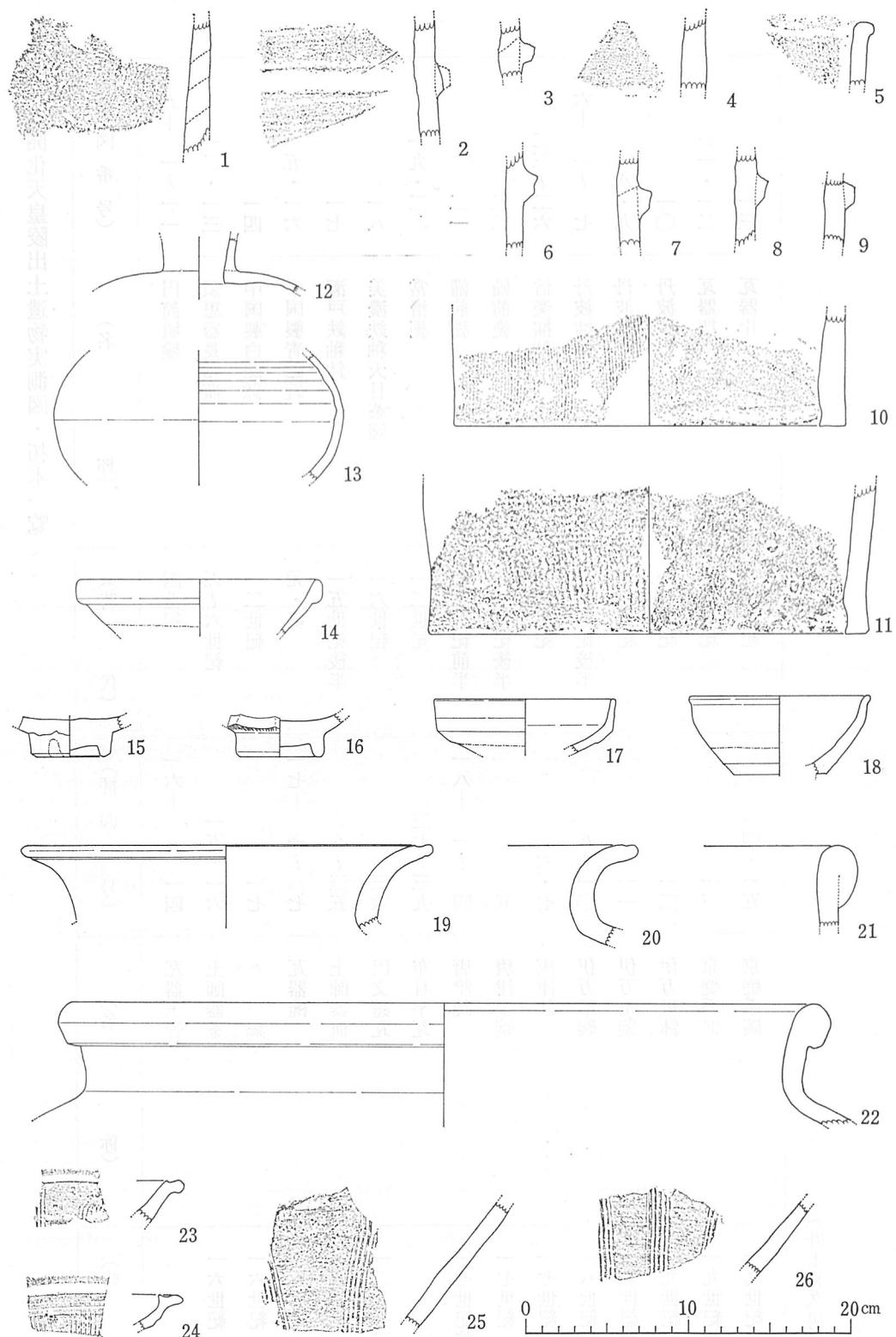
した可能性は強い。



第14図 開化天皇陵出土遺物

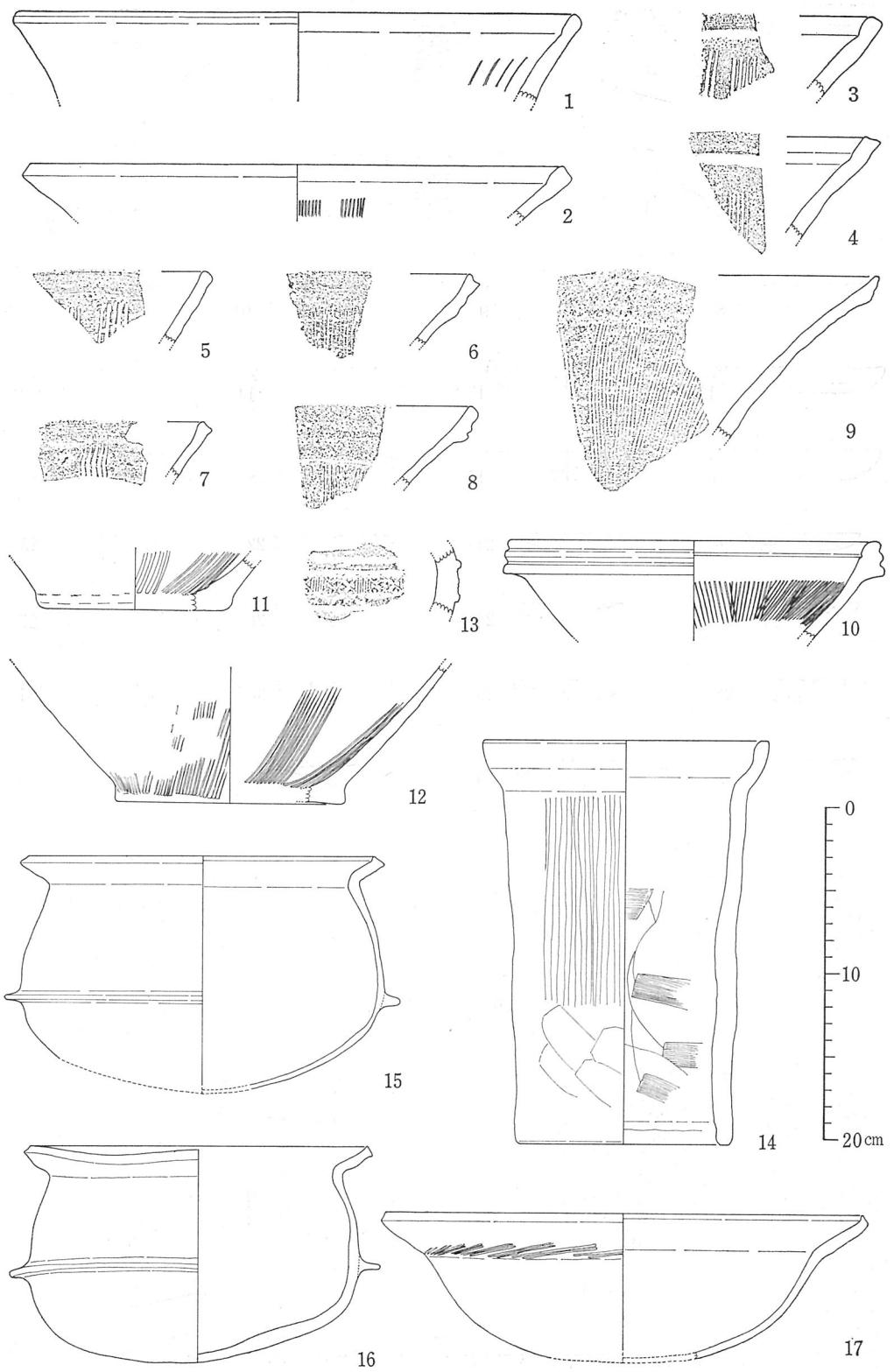
- 1 土釜, 2・3 瓦器椀, 4~6 瓦器小皿, 7 土師器皿,
8 土師器小皿, 9 唐津系碗, 10~16 土師器皿

開化天皇陵出土遺物実測図・拓本一覧

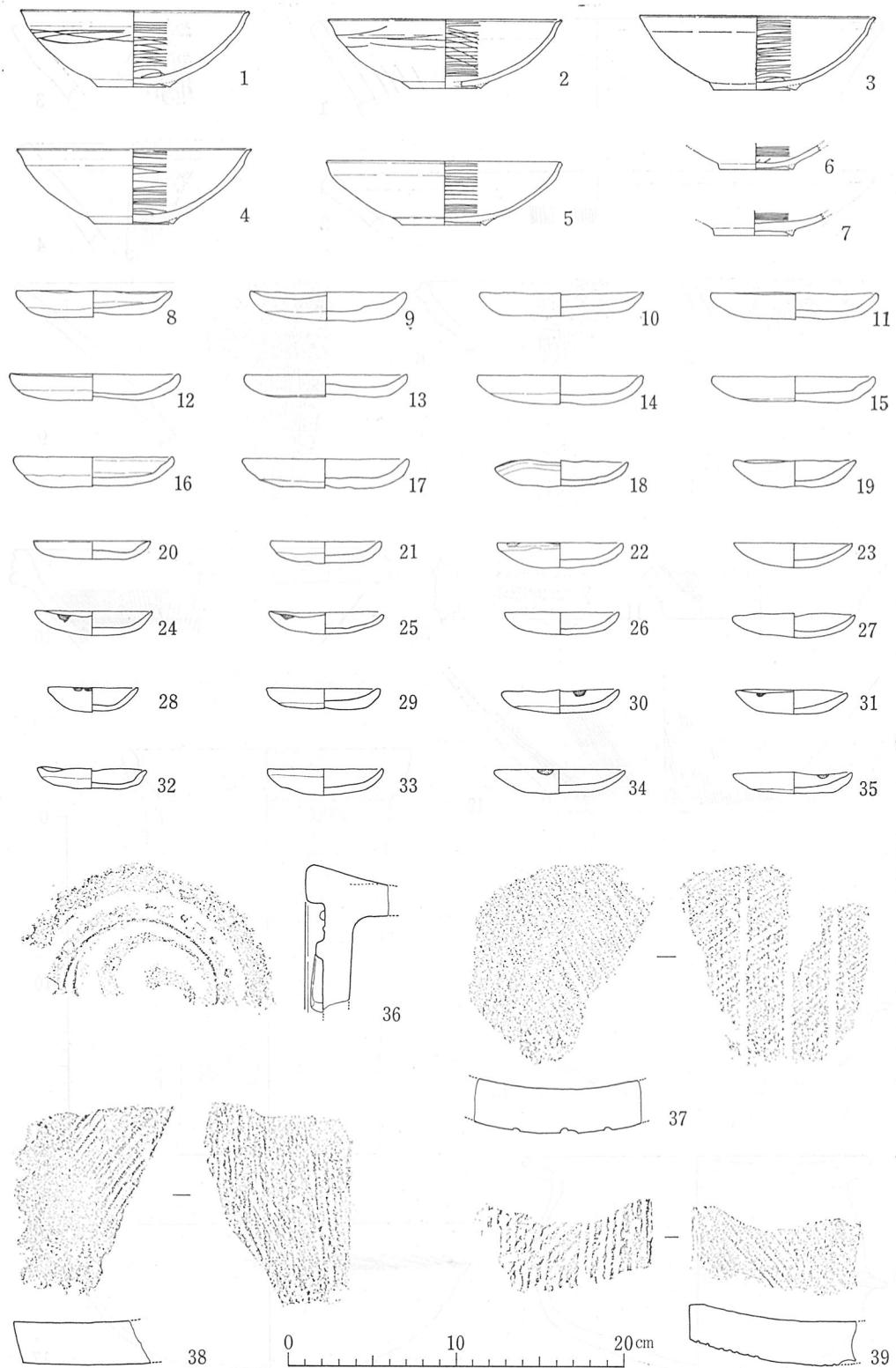


第15図 開化天皇陵出土遺物実測図（その1）（縮尺1/4 井上喜久男実測）

1~11 円筒埴輪, 12・13 須恵器, 14~16 中國陶磁, 17瀬戸鉢,
18 美濃碗, 19・20 常滑甕, 21・22 備前甕, 23~26 信楽撋鉢

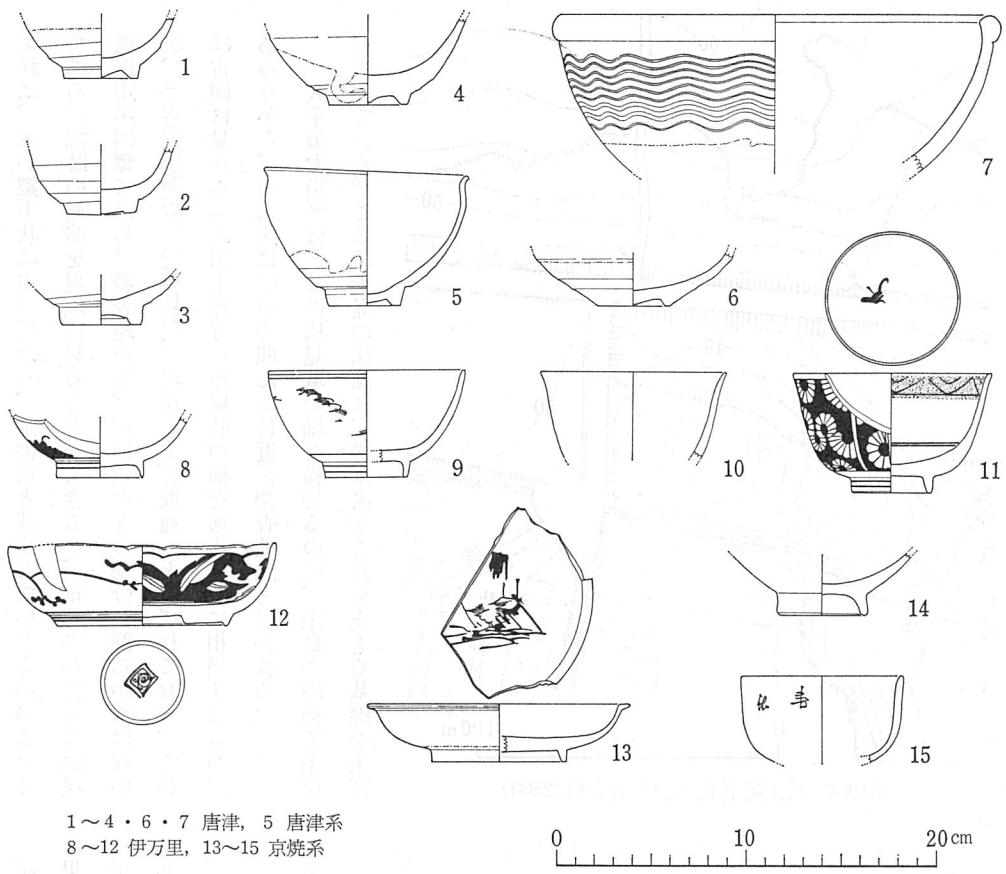


第16図 開化天皇陵出土遺物実測図（その2）（縮尺1/4 井上喜久男実測）
1～10 丹波摺鉢, 11・12 瓦器摺鉢, 13 瓦器, 14 瓦器土管, 15・16 土釜, 17 土鍋



第17図 開化天皇陵出土遺物実測図（その3）（縮尺1/4 井上喜久男実測）

1～7 瓦器椀，8～35 土師器皿，36～39 瓦



1~4・6・7 唐津, 5 唐津系
8~12 伊万里, 13~15 京焼系

第18図 開化天皇陵出土遺物実測図(その4) (縮尺1/4 井上喜久男実測)

以上の事から当堤防敷は、堀跡の可能性が強く、この堀は江戸時代以前に埋められて、石組遺構が構築された事が察せられる。しかしこれが開化天皇陵の周堀であるか否かは、今回の所見だけでは不明である。従つてこれら遺構を保存する為、止水壁は第9図破線の位置に粘土壁を設けることとした。

渡土手の状況は、第13図のように、盛土により作られたもので、各堤とも築堤の土留の杭が検出され、3堤では土留の竹しがらみを検出した。出土物は陶磁・瓦・土器等の破片が多数あつたが、近世の物を含み、文久修陵の際の築堤と見てよいようである。従つて樋管改修は予定通り実施した。

本調査の出土遺物は、三千六百余片で埴輪片などの古代のものから中世、近世のものである。このうちどれが当陵と直接かかわりのあるものか、精査出来ていないので判然としていないが、一応形のわかるものの一部を第14~18図に示した。(石田茂輔)

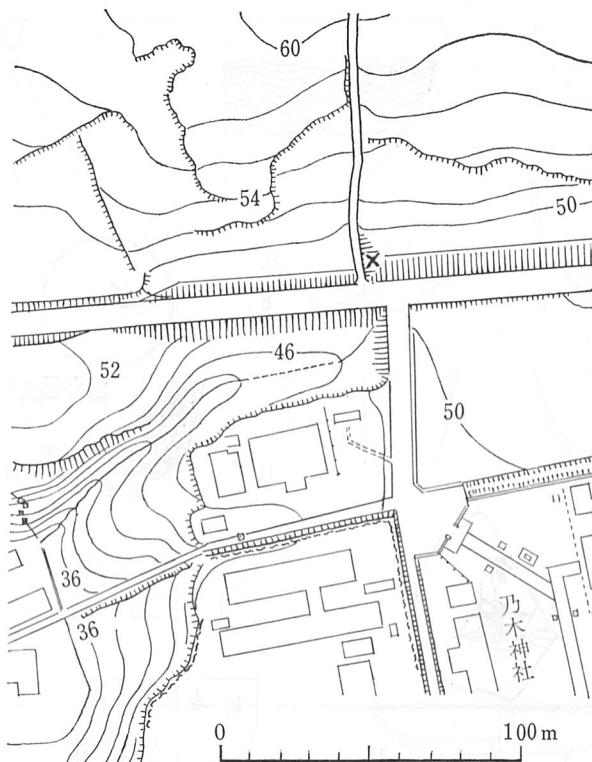
三 桃山陵墓地内の崖地擁壁設置及び排水管敷設箇所の調査

桃山陵墓地内の桓武天皇陵と乃木神社を結ぶ「大手坂参道」と通称する通路の一部(第19図の×印)が、降雨のため崩壊したので、その復旧工事(昭和五一年八月四日から)に立会った。

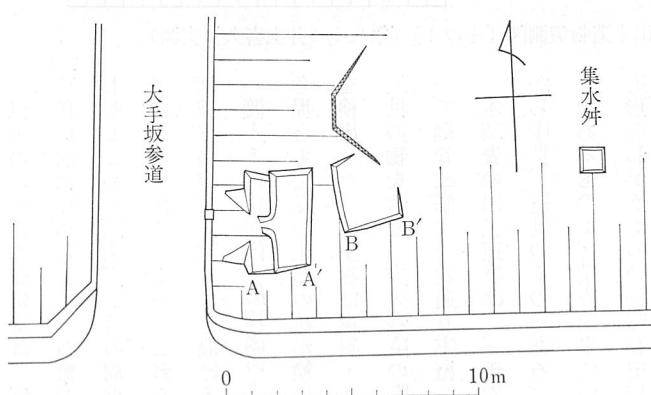
当該地付近は、京都市田中勘兵衛氏所蔵の伏見城古図の一本に

よれば、堀が鍵手状に走っており、宇治川と連絡していたもののごとくである。堀跡の概略を現地に見ることができるが、細部にわたっては現地比定が困難である。調査地点も、古図上のどの部分か詳らかではないが、「大手坂参道」の延長が、現在「上野坂通」と呼ばれており、これは古図に見える「本田上野守」の屋敷の前を通る道路に相当するものであろうから、第22図に○印で囲んだ付近が調査地点と思われる。

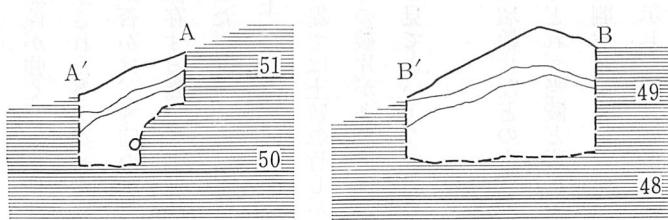
「大手坂参道」は、この伏見城の堀を横切るのに、土砂で埋めて土堤を渡している。この渡土堤の法面に、排水溝とこれを支える基礎を土留



第19図 桃山陵墓地調査位置図 (1/2500)



第20図 「大手坂参道」脇堀跡における堀方平面図

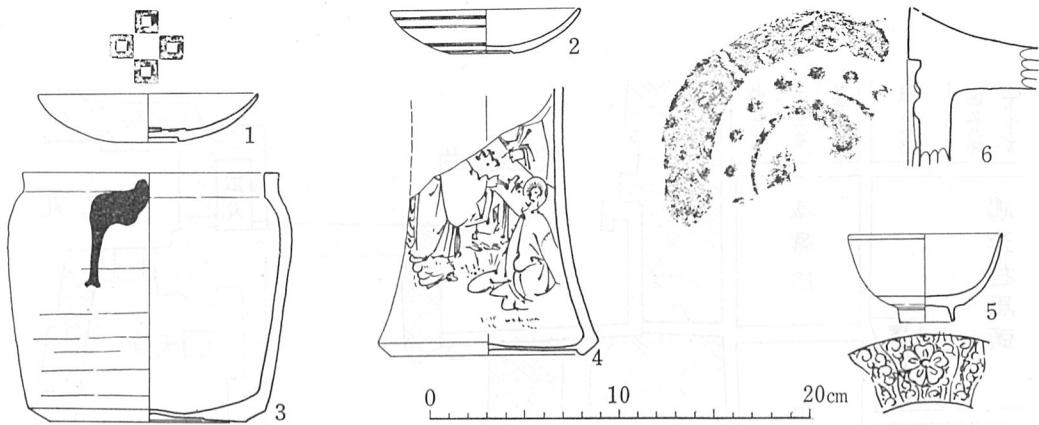


第21図 「大手坂参道」脇堀跡における堀方断面図 (1/80)

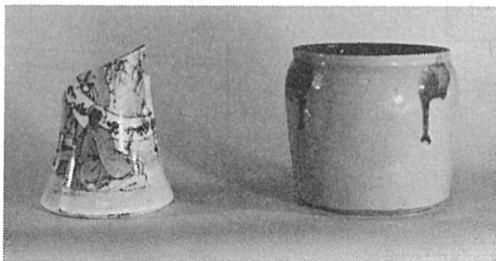
擁壁として取設けるとともに、別に集水井を取設ける工事に立会った結果、工事による掘削部分にはいずれにも伏見城の遺構は認められず、後世の盛土または堆積土であった。盛土は、渡土堤を築造した際のものであり、堆積土は、この渡土堤の盛土が流出して出来たものと思われる。出土品は、前記の盛土と堆積土中から出土したものばかりである。無釉壺（第23図1・2）黄白色を呈する堅焼きの壺で、型から起したもの。1の内面には、至近距離にある乃木神社と同じ四目結紋がある。



第22図 伏見城図（田中勘兵衛氏所蔵伏見城古図一本による）



第23図 「大手坂参道」脇堀跡の出土品(その1) (1/4)



第24図 「大手坂参道」脇堀跡の出土品(その2)

磁器（第23図3～5）3の

甕は、灰白色の胎土の上に、
外面肩の部分三ヶ所にきつい
コバールト色の釉をかけ、外底

と内頸を除く内外全面に黄灰
色の上釉をかけたもの。花生
と思われる4は、純白の素地
人をコバールトで描いた染付

（第23図6）中央に三巴を配し、その外に珠文を繞らしたもの。

（笠野毅）

け。5の碗は、純白の素地に、二種のスタンプを使ってきついコバールト

色の花文とくすんだコバールト色の唐草状の文様とを描いた染付。鎧瓦

（第23図6）中央に三巴を配し、その外に珠文を繞らしたもの。

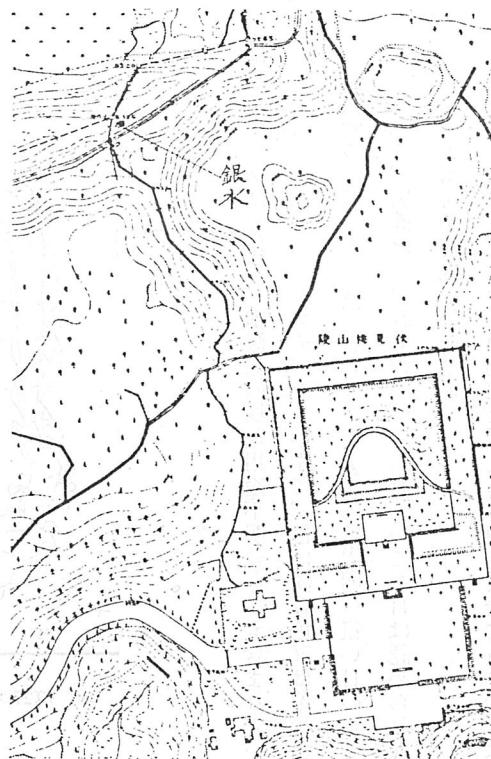
四 桃山陵墓地内銀明水の井戸浚えに伴う調査

桃山陵墓地は、慶長元年（一五九六年）木幡山に構築された伏見城の
域内に当る。従つて現在でも伏見城の遺構が陵墓地内の所々に点在す
る。

その遺構のひとつに、この城を築いた秀吉が茶の湯を楽しむために使
つたと伝えられる銀明水と称する井戸が現存している。宇治川の水脈が
地下水となり、この井戸に涌出していると想像される浅い井戸である
が、今でも満々と水を湛えている。近年相當に泥土と塵芥が流入して汚
染して來たので、昭和五十一年九月二十四日、浚渫作業を監区職員の手
で実施した。

井戸の位置は、檜樹、杉樹等が密生している樹林地帯の裾で、伏見桃
山陵の北西約三〇〇メートルにある通称伏見城の「本丸」北側にあたる
窪地にある（第25図）。

井戸周辺の雑木、雑草を除去すると、ほぼ外郭を確認することができます。
た。外郭は、約二米四方で直径約一〇センチの石で地上に一～三段に積

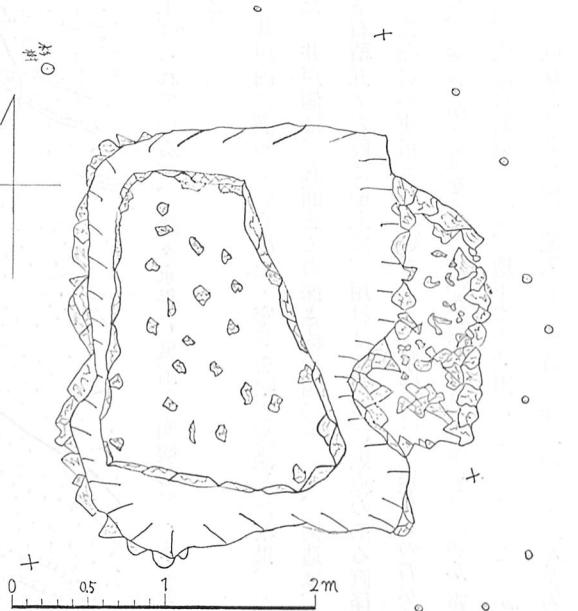


第25図 銀水位置図（縮尺 1/2000）



第26図 銀水井戸現況

井戸内に溜っている泥土・塵芥を除去浚渫した結果、次の事が判明した。井戸側は、底面までの深さ約一四〇センチ、構造は、四方に割石で空石積五～六段に積上げ、用材は灰白色に黒点のある直径約四〇センチの花崗岩が使用されている。又底面には、栗石大の石が敷かれているが、所々かく乱をうけ地山かと思われる堅い砂礫層が露出している。又、底部の南東隅には、地下水の涌出口があつて、ここから少量の地下水が間断なく井戸内に流入している。井戸内に落込んだ岩石や、堆積した土砂等を取りのぞく途中、次の様な遺物を採集した。いずれも完形品



第27図 銀水井戸平面図（縮尺 1/50）

で厚さ二ミリ表面は透明釉をかけ、これに白釉で文字を描き文様とする。江戸末期～明治時代。

磁器破片一点 「そばちよこ」の口縁の破片、厚さ一～三ミリ、白地に藍絵を施す。江戸時代～明治時代。

木栓一点 長さ六・五～六センチ、直径上部五センチ、下部三・七センチ、材は杉のようである。樽か大瓶のもの。

木棒一点 長さ約八センチ、直径約三センチの桜の皮付の丸棒で、一方の小口はきれいに切断した面を残している。

（南智次郎）

は無く小片又は破片で、木製品の様な用途不明のものも含まれている。

イ 瓦六点 五～一〇センチ前後の小片で、色は淡青色又は茶褐色で、表面の焼しの残つたものもある。布目は裏面に粗い目の残るもの一点で、表面はいずれもなでつけられていて布目は認められない。いずれも桃山時代以降のもの。

ロ 陶器片四点 大形瓶子の胴部と考えられ四片接続する。胎土は灰色